

羽明山龍護寺について

寺伝によると建久年間（鎌倉時代の初期）大神惟栄の遺臣山本源太有明が仏門に入り、主君の菩提を弔うため旧龍護寺に草庵を結んだ。後廃寺となっていたが、旅僧来てこれを再建す。本尊に千手観音を安置す。有明法師の名に因み羽明山龍護寺とすとある。（観音縁起については種々あるも大同小異である）

近世に入り毛利氏厚く龍護寺を尊崇して、堂宇を再建したり、各種の寄進をしている。

この由緒ある龍護寺も壇家がないため、年と共に損壊し雨漏りがはげしくなった。羽柴弘氏は之を憂い、地元の方々の協力を得て、龍護寺観音堂修築期成会を結成、広く浄財の寄進を受け、昭和五十二年一月修築完成を見た。

毎年十一月には佐伯史談会主催の「佐伯氏位牌祭」も行われる。春はつつじ、秋は紅葉と四季おりおりに美しい寺である。羽柴弘氏はこよなくこの寺を愛されていた。

（塩月記）

城山をめぐる

一月五日（火）午前一〇時、三の丸広場に集合した会員は男女約二〇名、お互いに新年の挨拶を交わし、清田先生よりきれいな精しいガリ版の資料を頂き、直ちに旧登山道より登る。城郭研究の第一人者小野英治会員より要所々々で精しい説明をきく。何回か登る城山ではあるが、今日はその昔の武士達を偲びながら一歩一歩踏みしめて登る。

今まで無造作に通った旧道、何げなく見ていた石垣もそれぞれ深い戦略的意図より生まれたものであることを知る。頂上ですでに十一時をまわる。

若宮八幡宮に詣で道を急ぐ。予定していた今泉元甫・高妻芳州・紀州の墓なども割愛して養賢寺へ。明石秋室・松下筑陰の墓から藩公の墓地に詣で養賢寺に着いた時にはすでに十二時をだいぶ過ぎていた。

養賢寺では秘蔵の毛利高政公像の開扉を頂き、解散したのは一時近くなっていた。城山めぐりは一日を駆けねばならない。

（塩月記）